

## 日本画の棲み家 — 「床の間芸術」 を考える

泉屋博古館東京（六本木） 23. 11. 02～12. 17



明治時代の日本は、あらゆるものの西洋化が進んで、絵画を観賞する場も例外ではなかった。かつて床の間や座敷を「棲家」とした日本画は西洋より導入された展覧会制度により、「展覧会」を新しい棲家とした結果、展覧会で“映える”巨大で豊彩な日本画作品が求められるようになった。一方、住友家の邸宅では、こうした流れに逆行し、床の間で映える「掛軸」や座敷を区切る「屏風」を引き続き重用することで、「木島櫻谷」「橋本雅邦」「岸田劉生」「竹内栖風」らによる、邸宅を「棲家」とする新たな日本画も生み出され続けた。

本展覧会は、今日その姿を消しつつある「日本画の棲家」に光を当て、かつて「住友」の邸宅を飾った日本画の優品を紹介するとともに、現代の6人の作家に新しい「床の間芸術」を制作依頼して、今の時代の「おうち観賞」のあり方も提起し特別な思いで企画されたものである。



木島櫻谷 《震威八荒図》 1916年



竹内栖風 《禁城松翠》 1928年



望月玉泉 《雪中蘆雁図》 右隻 1908年